

概要・目的

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、平成 30 年度をイメージして協議する。

P

平成 29 年度の当初計画

1 H27 に県教育委員会が示した H29 年度までの本校における取組

- グローバル教育プログラムの試行
 - ・自ら課題を発見し、解決策を考える探究型学習
 - ・コミュニケーション能力を育てる言語活動の充実
- 英語運用能力の向上
 - ・生きた英語を学ぶ体制づくり ALT (2名→4名)、外国人講師 (1名→2名)
 - ・ICT環境の整備
 - ・ICTの活用 (聞く力、読む力、話す力の育成)
- 国際交流
 - ・海外長期派遣の実施 (留学先との単位互換制度)
 - ・海外留学への支援の充実 (留学 1名→5名)

2 高知西高等学校の取組

取り組み① Agenda N 2017 による学校経営計画の遂行

- 学びの習慣の確立と学力向上
 - ・家庭学習習慣の確立 (1年：90時間/月、2年：100時間/月)
 - ・図書貸し出し数 1000冊/年 (1, 2年)
 - ・国公立大学合格者 100名以上
- 特別活動と部活動の充実
 - ・多くの生徒が皆勤となることを目指す
 - ・部活動への参加 (1年：加入率 90%以上、2年：継続率 80%以上)
 - ・学校適応 100% (1年) 30日以上長期欠席者 0
 - ・鎌歩会完歩率 95%
- グローバル教育の推進
 - ・SGHの取組の推進
 - ・社会貢献活動や自己研鑽活動への取組

取り組み② SGH プログラムの実施と磨きあげ

- ・グローバル探究 I・II・IIIの実施
- ・国内リサーチ、海外リサーチの実施
- ・国際シンポジウムの開催
- ・多読・多聴・多話・多書の推進
- ・英語による探究活動 (GE I、英語課題探究など)
- ・平成 29 年度から 3 年間のまとめを作成

D

平成 29 年度の取組状況

1 H27 に県教育委員会が示した H29 年度までの本校における取組

- グローバル教育プログラムの試行
 - ・H27 年度からスーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業として実施している。詳細は 2 高知西高等学校の取組を参照。
 - 英語運用能力の向上
 - ・生きた英語を学ぶ体制づくり ALT は 2 名のまま、外国人講師 2 名配置
 - 外国人講師は、1 年の英語表現 I 単独で授業を担当、今年度から普通科の授業も担当している。
 - ・ICT環境の整備→校内 LAN のルーターのスペックが低かったため、一度にインターネットに接続できる台数が 40 台であったが、6 月にルーターを更新することで、学校が保有する 200 台が同時に接続可能となった。
 - ・ICTの活用 (調べ学習、リサーチペーパー等の執筆、英語教育における聞く力、読む力、話す力の育成
 - 英語の授業では 1 年は多読で M リーダーというサイトで読書の理解度をテストで確認している。週 1 回活用している。その他、1 年生のグローバル探究 I (2 単位) で調べ学習、2 年生のグローバル探究 II (2 単位) で調べ学習とリサーチペーパーの執筆、3 年生のグローバル探究 III (1 単位) で調べ学習とともにリサーチペーパーの執筆に活用。全学年 280 名あるいは、半分に分けて 140 名ずつ交代で使用の工夫をして活用。放課後も資料作成やリサーチペーパーの執筆など、グループや個人で使用している。
 - 国際交流
 - ・姉妹校ザフレンズスクールへの交換留学 1 名 (留学の単位を認定)
 - ・海外留学への支援の充実は実現されていない。→トビタテ留学 JAPAN の活用 (3 年生男子 1 名、スペイン、8 月中旬から 3 週間)

2 高知西高等学校の取組

取り組み① Agenda N 2017 による学校経営計画の遂行

- 学びの習慣の確立と学力向上
 - ・家庭学習時間調査を 6 月以降に学期ごとに実施予定。
 - ・図書貸し出し数 1年：549冊 (433)、2年 186冊 (241)、3年 443冊 (612) (9月まで) (内は昨年)
- 特別活動と部活動の充実
 - ・出席状況 (1 学期期末試験、7 月 20 日まで)
 - 1年 欠席 51(35)、遅刻 13(25)、早退 18(7)、皆勤 206 名(228 名) (73.3%(81.1%))
 - 2年 欠席 163(97)、遅刻 105(58)、早退 27(19)、皆勤 165 名(187 名) (58.9%(66.8%))
 - 3年 欠席 167(112)、遅刻 104(51)、早退 25(18)、皆勤 173 名(205 名) (62.9%(74.5%))
 - ・部活動への参加 (1年：加入率 93.2%、2年：継続率 87.6%以上)
 - ・学校適応 100% (1年)
- グローバル教育の推進
 - ・取り組み②に記載
 - ・社会貢献活動や自己研鑽活動の呼びかけ

取り組み② SGH プログラムの実施と磨きあげ

- 1年：グローバル探究 I
 - 高知県の課題を知る 10回 19時間講師 14名招へい
 - 高知県の強みと弱みを分析する 6回 (7/12~9/27) 12時間
 - 県内 7 地域へのフィールドワークと SWOT 分析
- 2年：グローバル探究 II
 - グローバル課題の調査 10回 19時間 講師 9名招へい
 - SDGs を基にした世界の地域課題解決の立案 5回 (7/14~9/22) 10時間
 - 「夏休みアクションプラン」と称した専門機関への聞き取り調査やアンケートなどを実施
 - 課題及び仮説の設定、解決案の提示 大学教授による指導・助言 8名×2回 (6/30、9/15)
- 3年：グローバル探究 III
 - 個人によるリサーチペーパー作成・修正 全員一次提出済み 16回 (7/12~9/27) 16時間
- 国際シンポジウム開催 (7/13) 於：オレンジホール
 - 午前の部：生徒発表 3 (使用言語：英語) 3 年普通科 1 グループ、英語科 2 グループ
 - 午後の部：大学教授と生徒による国際シンポジウム テーマ：「高知県の地域創生、世界の地域課題解決」
 - 【生徒の感想】
 - 同じクラスの友人が堂々と英語で発表した姿や午後のシンポジウムで大人と対等に意見を交わす姿に感銘を受けた。
 - 生徒の発表はすべて英語での発表で、スクリーンも英語だったので、十分に理解することはできなかった。和訳も入れてほしかった。
 - 発表が英語でわからなかったが、日本の森林がなぜ失われているか気になったので調べてみて、理解できた。プレゼンのテクニックで聞き手を引き込むよう工夫されていて勉強になった。
- グローバル・リンク・シンガポール 2017 (シンガポール国立大学) で発表 3 年生 4 名
- 香港ルター高校来校 (SGH 事業による香港リサーチ提携校) 7/9~11 教員 2 名、生徒 10 名
- 海外リサーチ 香港リサーチ (9/18~22) 1 年生 4 名
- シンガポールリサーチ (9/18~22) 2 年生 9 名
- 台湾リサーチ (9/26~30) 1 年生 11 名
- グローバルマインドなどの生徒の成長を分析するための生徒アンケートを 5 月に実施 (2 月に 2 回目を実施予定)
- オーストラリア語学研修 (7 月 31 日から 17 日間) の参加者 12 名

C

A

課題 (●) と今後の取組の方向性 (→)

1 H27 に県教育委員会が示した H29 年度までの本校における取組

- グローバル教育プログラムの試行
 - 県内外における生徒の活動が活発になればなるほど、経費が必要となり、生徒の負担が増加する。
 - 県予算での支援を継続していただけるよう要望していく。国際交流推進会から支援をお願いする。
 - 英語運用能力の向上
 - 外国人教員では大学入試に向けた補習等の対応が困難。
 - IB 担当以外の教員配置について検討していく。
 - ICT環境の整備
 - 現状では授業の中で、生徒一人ひとりが英語を話す機会はどうしても少ないので、スカイプ等を活用して、生徒一人ひとりが英語を話す環境づくりを検討する。
 - 国際交流
 - 生徒の費用負担を考慮した交流先の開拓
 - SGH による訪問を活用して、延平高級中学(台北)やルター高校(香港)をはじめ、台湾や香港などの新たな人脈ネットワークの拡大を図る。
 - 県内外の大学等が企画する国際交流企画への積極的な参加を呼び掛ける。

2 高知西高等学校の取組

取り組み① Agenda N 2017 による学校経営計画の遂行

- 学びの習慣の確立と学力向上
 - 家庭学習習慣の定着。
 - クラス担任や教科担任による面談を中心に生徒一人ひとりに支援していく。
 - 読書習慣の定着。
 - 図書委員会によるお勤めの本の紹介など、生徒を主体として取組を推進していく。
 - 特別活動と部活動の充実
 - 出席状況については、1 年生は、欠席している生徒はほとんどが 1 日か 2 日で特に問題はない。2, 3 年生はメンタル面などの問題から欠席が多い生徒が数名ずついる。
 - 学年団を中心として、生徒支援委員会を定期的に持ち、情報共有をしながら、スクールカウンセラーと連携して対応している。
 - グローバル教育の推進
 - ・取り組み②に記載

取り組み② SGH プログラムの実施と磨きあげ

- 1年：グローバル探究 I
 - 県内リサーチでは、受け入れていただける企業や団体に限りがある。
 - 生徒 40 名の受け入れ可能な場所が少ないので、平成 30 年度には借り上げバスを増やすなど、20 名ずつで行動することを考える。
 - 生徒は SWOT 分析を初めて体験するため、進んでいないグループもいくつか存在する。
 - 平成 30 年度は、2 週連続で行うことで慣れてもらいながら、高知県の地域創生についてのテーマ設定へ繋げていく。
- 2年：グローバル探究 II
 - リサーチペーパー作成では、大学教員を 3 回お呼びして指導・助言を得るようにしたが、教授の専門外の分野については、適切な指示をもらえないグループもあった。
 - 平成 30 年度は、大学教員の方に生徒の状況を理解していただくとともに、高校生に慣れた助言者を選出する。
 - 夏休みアクションプランでは、探究テーマが決まらず、夏休み中に実行できなかったグループもあった。また、外部との連絡で、お盆や休暇があり、相手先とうまく連絡がつかない、あるいはこちらへの連絡がつかない等の問題もあった。
 - 平成 30 年度は、グループごとの進捗管理を徹底できるよう、定期的に生徒に進捗状況を報告させるようにする。
- 3年：グローバル探究 III
 - 個人リサーチペーパー作成では、1 学期間で作成としたため、探究時間が短かった。
 - 今年度の 3 月は、2 年の臨時時間割を使って取組を早める。
- 国際シンポジウム
 - オールイングリッシュの発表であったため、生徒や外部の参加者などの聴衆にとって理解が困難であったという声があった。
 - 現 2 年生のグローバル探究 II の内容を発表することになるので、今年度の成果を踏まえたゴールイメージをもった指導を行う。平成 30 年度は、プレゼンテーション資料の要所に日本語で示すことも必要。
- 海外リサーチ
 - 昨年の反省から、事前学習、探究活動に早く取り組ませるため、4 月末までに募集を行った。しかし、人数が少なく 2 次募集を行ったが、それでも昨年より 1 か月早く動くことができた。
 - 平成 30 年度も同じ日程で募集をかける。
 - 9 月の海外リサーチは台風の影響があり、昨年今年も旅程の変更を余儀なくされるリサーチがあった。
 - 平成 30 年度は、10 月中旬~11 月上旬の実施も可能かどうか、検討したい。

平成 29 年度 到達目標

- ・国公立大学合格者 100 名以上などの Agenda N 2017 の目標を達成する。
- ・3 年間の SGH プログラムを完成する。

本年度テーマ

主体的な学びや協働的な学びを通じた学習のあり方について

事業内容

高知西：高知西高等学校の取組について

概要・目的

本県におけるグローバル教育では、生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身につけるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成することを目的としている。生徒が学習を進めていく中で、どのような活動が必要で、それらをどのような手順で積み重ねていくのかについて、具体的に示して指導することが必要である。本年度は、平成 30 年度をイメージして協議する。

P

平成 29 年度の当初計画

1 H27 に示した本校 SGH 事業における英語教育に関する仮説

- SGH における仮説（2つのうち英語教育に関するもの）
仮説 2：英語科で実施している英語による探究型授業を普通科でも行い、仮説 1 の探究活動と関連付けることで、国際的な場面において世界の人と英語で対等に意見交換をすることができるコミュニケーション能力が身に付く。

2 本校における英語教育の取組

①SGH 課題研究として行う英語の取組

英語活用力の育成（オールイングリッシュで探究活動）
（2 年次）「英語表現Ⅱ」「グローバルエデュケーションⅠ」で、「信念／信仰と食」「食とフェアトレード」「言語／習慣と食文化」のサブテーマに基づいて、少人数編成講座で、海外生徒等とのディスカッション等も活用して英語での探究活動を深化させる。
（3 年次）「英語課題探究」の選択生徒と英語科の生徒は、本校 SGH 事業の集大成として行う「国際シンポジウム」を運営し、英語で成果発表を行う。

②SGH 課題研究外として行う英語の取組（主に 1 年次）

- ①多読——年間で 2.5 万語を目標に各自の関心とレベルにあった英語図書を読む活動
 - ・未知語に遭遇しても類推しながら読み進める力を養成する。
 - ・学習者用に編集された英語ではなく、自然な英語表現に慣れる。
- ②多聴——Voice of America 等インターネット上の英語学習サイトを利用した、英語の要点を聞き取る活動
 - ・連結、脱落などの特徴を理解し、自然な状況で話された英語の要点をつかむ力を養成する。
 - ・自然に近いスピードで話された英語を聞き取ることに慣れる。
- ③多書——毎週 100 語程度のまとまりのあるパッセージを書く活動
 - ・具体例等を交えながら、論理的に英語で考えをまとめて書く力を養成する。
 - ・日本語を解しない人が要点を理解できる英文を書く力を養成する。
- ④多話——ディベートやディスカッションの形式を利用し、多書活動と関連付けて行うスピーキング活動
 - ・論理的に英語で考えをまとめて口頭で伝える力を養成する。
 - ・日本語を解しない人が要点を理解できる英語で話す力を養成する。
 - ・話し手、聞き手の双方の立場から、発言内容が理解されるように工夫する力を養成する。

3 目標とする英語力

①Agenda N 2017 による指標

- 英語運用力の向上
- ・英語検定の取得
 - 1 年：準 2 級 普 50%、英 100% 2 級 英 20%
 - 2 年：準 2 級 普 80% 2 級 普 10% 英 50%
 - 3 年：2 級 普 20% 英 100% 準 1 級 英 3 名

②SGH 事業による指標

- 英語運用力の向上
- ・SGH 対象生徒の卒業時における生徒（3 年英語科 + 3 年普通科文型）の 4 技能の総合的な英語力として EFR の B1～B2 レベルの生徒の割合を、80%以上とする。

D

平成 29 年度の取組状況

2 H27 に示した本校 SGH 事業における英語教育の取組

①SGH 課題研究として行う英語の取組

- （2 年次）「英語表現Ⅱ」「グローバルエデュケーションⅠ」——ALT との TT、または外国人講師による授業「信念／信仰と食」「食とフェアトレード」「言語／習慣と食文化」のサブテーマに基づき、
 - ①全体でサブテーマ入門
 - ②グループでサブテーマに関する論題を選択して探究し、論拠を明らかにした発表原稿と資料を作成する。クラス内プレゼンを行う。
 - ③個人でサブテーマに関する論題を選択した探究し、論拠を明らかにした発表原稿と資料を作成する。ポスターセッション形式でプレゼンを行う。
- （3 年次）「国際シンポジウム」での成果と発表運営
 - ①成果発表としての研究発表 3 本——完全英語で発表、質疑は一部日本語を含む
 - ・普通科「英語課題探究」選択者
‘Sustainable Agriculture’
‘The Crises in Local and Global Forests and Ideas for Solution’
‘Why Not Fair Trade?’
 - ②「国際シンポジウム」の発言——日本語で発表、質疑は一部英語を含む
発表者 2 名（他に外部より 3 名）普通科生徒 1 名 + 英語科生徒 1 名
司会進行 2 名
 - ③「国際シンポジウム」の運営
すべての進行において、英語と日本語の両言語で司会

②SGH 課題研究外として行う英語の取組（主に 1 年次）

- ①多読——年間で 2.5 万語を目標に各自の関心とレベルにあった英語図書を読む活動
 - ・学年やクラス毎に目標語数を定めて、できるだけ多くの英語を読む活動を授業内外で実施
 - ・多読入門期——授業の一部を使って、自分のペースで英語の本を読み、input log（ペーパー）に感想を書き、進捗管理
 - ・多読初級者——授業の一部を使って、インターネット上のサイト M-reader で理解テストを受け、進捗管理
 - ・多読中級者——授業の節目で多読に関するオリエンテーションを行い、授業外で多読を進める。
- ②多聴——Voice of America 等インターネット上の英語学習サイトを利用した、英語の要点を聞き取る活動
 - ・インターネット接続の問題から、サイト利用による多聴は未実施。
 - ・ネイティブ・スピーカーの活用
- ③多書——毎週 100 語程度のまとまりのあるパッセージを書く活動
 - ・1 年、2 年とも週 1 回英作課題
 - ・課題と同様の形式で定期テストに出題
- ④多話——ディベートやディスカッションの形式を利用し、多書活動と関連付けて行うスピーキング活動
 - ・（1 年）外国人による単独授業で話す活動を多く実施
 - ・授業内の帯活動として、多話活動時間の設定

3 目標とする英語力

①Agenda N 2017 による指標

- 英語運用力の向上
- ・1、2 年については学年で一度は受検できる体制づくり（保護者の了解を得て、受験費用を集合済み）
 - 第 1 回の英検は 189 名が受験し、66 名（準 2 級 26 名、2 級 39 名、準 1 級 1 名）が合格した。
 - 第 2 回の英検は 87 名が出願（9 月 16 日現在）
- ・英語検定の取得状況（平成 29 年度第 1 回検定結果まで）
 - 1 年：準 2 級 普 2.9%、英 75% 2 級 英 10%
 - 2 年：準 2 級 普 40.4% 2 級 普 1.3% 英 24.4%
 - 3 年：2 級 普 14.0% 英 88.5% 準 1 級 英 1 名

②SGH 事業による指標

- 英語運用力の向上
- ・3 年 SGH 対象生徒（英語科 + 普通科「英語課題探究」選択者）の、現在における CEFR の B1～B2 レベルの生徒の割合、79.2%
（英語検定 2 級以上合格者の数を根拠とする）

C

A

課題（○）と今後の取組の方向性（→）

2 H27 に示した本校 SGH 事業における英語教育の取組

①SGH 課題研究として行う英語の取組

- （2 年次）「英語表現Ⅱ」「グローバルエデュケーションⅠ」
- 探究活動そのものは、「グローバル探究」で慣れており、検索等にはさほどの時間を要しないが、問題を掘り下げることが弱い。また、英語での発表はある程度のレベルまで来たが、聴衆はその内容の理解に至らないことが多い。そのため、意義ある質疑応答になりにくい。

→日本語でのリサーチを止めるのは現実的でないため、リサーチは授業外で行い、授業内は英語でまとめたり発表したりする時間に充てる。

- 「グローバル探究Ⅱ」における探究テーマと無関係に進めている場合が多い。

→「グローバル探究Ⅱ」の担当者、英語授業担当者が活動内容を相互理解できる機会を設け、英語で探究した内容や視点、日本語での探究内容に生かされるように指導する。

- （3 年次）「国際シンポジウム」での成果と発表運営
- 当初意図した海外交流校の生徒による発表を含めることができなかったため、英語使用の必然性が薄れた。また、2 年次のリサーチペーパーは多くの修正加筆を要し、「国際シンポジウム」を意図したものはなかった。英語での発表は高い評価を受けたが、全校生徒にその内容が伝わったか否かが疑問が残る。

→「英語課題探究」の選択者と英語科の生徒は、次年度の「国際シンポジウム」を見据えて、2 年次から英語でリサーチペーパーを書くように指導する。

- シンポジウム形式で行ったため、発言者間のやり取りや、フロアからの質問を十分に確保しなかったことに不満の声が聞かれた。

→成果発表会の中に、ディスカッションの要素を取り入れる。

②SGH 課題研究外として行う英語の取組（主に 1 年次）

- 多読活動は順調に進んでいるが、自然な英語力獲得のためにどの程度寄与しているかは検証できていない。また、多読活動は現時点では不十分である。

→2 年次、3 年次で必要とされる英語力の獲得に向けて、1 年次の個々の活動が基礎力獲得につながっているかどうかを検証する。
授業内の活動と授業外の個別活動を精査する。

3 目標とする英語力

①Agenda N 2017 による指標

- 英語運用力の向上（英検の取得）
- 英検受験への対応

→第 2 回、第 3 回での受験に向けて英語の授業の中で生徒に受験するように指導する。
→英検の 2 次試験の内容を踏まえた授業を行っていく。

平成 29 年度 到達目標

- ・国公立大学合格者 100 名以上などの Agenda N 2017 の目標を達成する。
- ・3 年間の SGH プログラムを完成する。